

# 始期の教育

女高師附屬小學校 田 原 美 榮

## 一、低學年の教育原理

從來の初等教育に於ける幼兒即低學年兒童の教育が可成論理主義に傾いた純然たる學科組織の課業的方法であつた事は此處に改めて云ふ迄もないことである。即一年から六年まで學科の多少はあれど其組織方法に於て劃一的な教育法が行はれてゐたのである。其處に吾々の疑問があり不満足があつたのである。既に研究されてゐる心理學上から見ても明らかに幼兒期と少年期とは異なる特徴を有つて居り、其特徴を特徴として伸びやかに生活せしむることが各時期を完成せしめることとなり且又個體の發達の圓滿なるものであることも言を挾たないことである。

然らば之を如何に教育するか、といふことは子供に對する各方面の研究と種々の實驗とに依るべきもので直ちに答へることの出來ぬ問題である。生活教育といひ自然教育といひ遊戲中心の教育といひ何れも子供の生活特徴を理解して其生活の豊富と充實と純粹と發達とを意味した生活其ものの教育を考へられてゐるものと思ふ。吾々は此意味に於てこそ是等の唱道に對して味方になり得るのであつて、往々此の原理を縦とし尙從來の教科系統を横とした云へば折衷主義の教育には未だ疑問が晴れない者である。

子供の全生活が果して遊戲生活なりと認める事が出來るならば最も教育の一方法として取入れね

ばならぬ。即彼等のする人形ごっこ、おまじごと、賣屋遊等の中に彼等は無意識に國語的生活もし、數量的生活もし、實社會の事物事象に關する事も體驗し團體的社會的問題も多々生じるのである。國語を國語とし、數生活を算術として扱はずに彼等の生活の切實なる要求への教育なのである。彼等は此處に於て満足であり愉快である。

又子供が衝動的な生活の特徴を有つならば之に應じた方法も考へられねばならないであらう。又一方に之が順調の發達を圖り馳ては目的遂行・持續への環境も與へねばならぬ。

又彼等は具體的生活にある者である。即經驗蓄積時代である。彼等が日常五官に觸れるものゝ殆んどは新經驗新印象であらう。此意味に於て印象の蓄積時代、觀念構成への始期とも考へられる。此の意味から所謂低學年の子供にはものそれ自身の體驗即直觀に訴へて或はそれを分解的に理解し

或は總合的な感覺感情を以て觀ることが生活の一部面として取入れられねばならぬ。而して其内容となる材料はやはり子供の生活の中に活躍する處のものでなければならぬ。即吾々の子供觀から考へた處及實驗の結果からみて、子供の遊戲生活から取入れられるもの、彼等の家庭生活學校生活に於て彼等に關係あるもの、及自然物自然現象、及一般社會に於ける事件の中彼等に關係あるもの等である。

彼等は又じつとして話を聞いたり考へたりするよりも作業することを好むものである。彼等には只手を動かして缺を使ひ紙を切つたり張つたりする造りつゝあることを喜ぶ外に生産の喜びがある。既成の完備した美しいものを用ふるよりも自らの力で造つた不完全でも拙いものでもを使ふことを非常な喜びとする者である。それは吾々がトランプや歌留多やお雛様を造らしめた經驗の上の

事實である。而して彼等の製作の喜は又彼等の知つた新經驗新印象を具體化する處にある。即ち直觀によつて得た印象知識を發表し具體化することは彼等の生活の中に介在する普遍的な流である。吾校に於ける低學年教育は之を原理として實驗したものである。即ち直觀を第一とし第二に說話第三に作業とし、印象・理解・發表を一材料毎に繰返すわけである。尙此の外に子供の休息と開放を與へる爲に遊戲の時間を置く。

## 二、教育の實例

題目 なんきん豆

直觀事項

- 1、豆のなる木全形、2、豆のなつてゐる状態
- 3、根の状態、4、莖葉の状態、5、實の内部（殻皮種等）

說話事項

- 1、豆は根でないこと、2、どうして食べるか

實際（第一日）

九月の始め頃であつた。逗子の方から通つて來る一兒童が落花生の根ごとを珍しいからと云つて持つて來た。都會に住む子供達は落花生は食べてもどんな植物であるかは殆んど知らなかつた。全級の子供の興味は忽ち集る。而かも他の何物よりも強かつた。幸六本程あつたので級を六組に分けて一本宛分配して、各組各自の直觀に訴へる。豆に觸れて見る者、引張つて見る者、又根に注目して根瘤を珍しがる者など色々である。其中に「豆を取つてもようございますか」などの要求が出る「一人が一つならば」と云つて許すと喜んで取つて壞してみる。彼等の豆に對する經驗は煎つたものであるが今日は生であるから皮の中々むけないことや澱皮のとれないことを體驗する。子供の多くはやはり豆が莖より根の様なものになつて下つてゐることに最も興味を有つた様であつた。

次第に見る部分がなくなつて來ると「先生繪に畫いてもよろしうございますか」と叫ぶ者が出て來る。又

「豆は根ですか、根に實がなるのですか」

「根の瘤は何ですか」

「どうして食べるのですか」

などの質問が出る。是等の問題を板書して置いて全體の觀察の終つた頃說話に移つて行く。即前の子供から出た質問に對して解決を與へ尙子供の不可解に答へる。其外に子供の直観を助け知識として與ふべき話があれば此處で取扱ふのであるが此時は子供から出るものゝ外になかつた様である。持つて來た子供は尙この豆についての由來を話すことになつてゐる。他の子供も何か經驗談等を話し合ふ。

作業への動機は既に直觀しつゝある間に造られてゐた者もある。即

「繪に畫いてもよいか」其要求のある者は多かつた。

「今日はこれを繪に畫いたりお話に書いたり致しませう」

其處で今日の印象は今日の作業へと發展する。此際平面的な文字や繪の發表よりも製作發表を希望する者には之をも許すべきものである。然し此時は他の希望は出なかつた。然し同じ平面的な發表でも其形式は自由である。或は分解的理智的に或は所謂總合的に見た繪として畫き或は空想を加味した實・葉・根等の假話を作る等個人の能力と性格とに應じて種々の形式に發表せられる。

今日の作業はこれを完成して終る。あと遊戯の時間にする。一日の中一時限分（四十分乃至一時間）位は戶外に出して休息と自由を與へる必要がある。然し疲勞と興味の狀態によつて必ずしも此の限りでない。

## 第二日

昨日のなんきん豆はまた大部分木に着いてばけつに浸してある。子供等は昨日の興味がまだ去らず頻りに豆に觸れて見てゐる。昨日の作業の記述の中に「此の葉を取つて柏餅屋がしたい」など書いてあつた、其の叫も私の頭に残つてゐた。即今日の作業への發展の道はそれになつた。先づ昨日の作業の結果について彼等の印象を呼び起す。全體的によい作業であつたことを賞めて觀察の誤や記述上の誤を一般に注意し、優秀なものや形式の異彩なものを發表して一同批評鑑賞をさせる。最後に柏餅屋を希望した者のを發表して一同の賛成を求め、大喜びで一同柏餅屋の準備にとりかゝる。葉を取つて之を賣る者、粘土屋の店、柏餅屋の店、お客様などに分れて賣屋遊が始まる。指導者は各店を巡視して賣買取引を監督する。又時々お客様になつて買ひにも行く。かうして此遊は一時間餘

も續いた。最後は子供の程度に應じて賣上高の計算をさせ、又今日の賣屋遊に生じた子供相互の問題感想等を聞いて整理をして終る。(完)

本會主幹の堀七藏氏を横濱阜頭に御送りしたのは昨年の櫻の頃でございましたが、御豫定通り一ケ年間の歐米教育視察を卒へられて、三月二十九日に桑港を御出帆、歸國の途につかれました。船は春洋丸、四月十五日の夕方横濱着、直ちに御歸京の筈です。